

仏教企画通信

43号

発行日:平成28年3月1日

発行所: 有限会社 仏教企画
〒252-0113
神奈川県相模原市
緑区谷が原2-9-5-5
Tel.042-703-8641
Fax.042-783-0989
発行人: 21世紀の仏教を考える会代表
藤木 隆宣
E-mail fujiki@water.ocn.ne.jp

戦後七〇年に憶う(3)

「空気」と仏教について

駒澤大学名誉教授 佐々木宏幹

はじめに

すこしつこいような気もするが、もうしばらく前号でも触れた「空気」というものについてこだわってみたい。

よく知られた諺の一つに「喉元過ぎれば熱さを忘れる」というのがある。苦しかったことも、過ぎ去れば全く忘れてしまふとか、苦しいときは人を頼み、苦しさが去ればその恩を忘れてしまふことを意味する。

平成二三年(二〇一一)三月一日に生じた東日本大震災も五年も経つと、あの日本中を震撼させた大災害を大きく取り上げたメディアも、別の問題に視線を移してしまっただかに見える。

それは日本全体の社会的「空気」が変化したことを物語るものである。現地の人びとは別として、多くの日本人に

とつて五年前の出来事はすでに喉元を過ぎてしまったのである。

近頃では新聞もテレビも大きく報じるのは、専ら安全保障関連法案である。東北の大災害のときに援助しようとして各地から駆けつけた学生ボランティアたちは、今や国会前で「安保反対・戦争反対」と大声で叫んでいる。空気は自然から政治へと方向性を移した感がある。

それでは「空気」とは一体何かという問題に迫る前に、人びと、特に知識人は「空気」という語をどのようなときに使用するかについて一例を挙げてみよう。

慶応義塾大学で英語・英文学を講じておられた池田潔教授(一九〇三・一九九〇)に『自由と規律—イギリスの学校生活』(岩波新書・初版一九四九)なる名著(と私は思っている)がある。

本書は平成二五年(二〇一



三)現在で一〇四刷発行となっている。堅い本にしては凄いい刷数である。

池田教授は本書の「序」において自己紹介を行っているが、それによると教授は中学を終わらずにイギリスに渡り、パブリック・スクール(日本の中学・高校に相当)のリース・スクールに三年、ケンブリッジ大学に五年、そしてドイツのハイデルベルク大学に三年在籍した方である。

在籍の時期は第一次世界大戦の後始末が終わらないうちから満州事変の直前までとされる。パブリック・スクールはイギリスの支配階級の子弟の教育機関であると目されており、生徒の年齢は一二、三歳から一八、九歳、在学期間は四年ないし六年となっている。さて、池田教授がそのパブリック・スクールの生徒であったときに次のようなことが起こった。

ピアノが得意だが数学が苦手な生徒にたいして、数学の教師がピアノの練習時間を割いて数学の勉強に当てるように忠告したことがあった。生徒は一三、四歳であったが、教

師にこう言ったという。

「数学の勉強が足りないというのなら数学の教師としてごもつともなことであり、謹んでお受けする。しかしピアノが正当な課目であり、自分が数学の時間にピアノを弾いた訳ではないのだから、自分のピアノの練習はピアノ教師と自分との関係の問題であり、数学の教師である貴先生の関知するところではない。自分には筋の通らぬ指図を受ける必要はなく、無用の干渉は迷惑だからお控え願いたい」と。

これにたいして教師は直ちに謝って話は一件落着となったが、池田教授は相手を怖れず信ずるところを述べて憚らない少年の態度と、面子に拘って非に固執しない教師の男らしさとに驚いたという。

そして、少年が教師にたいしてこのような態度がとれたのは、教師が自分の誤りに気がつけば釈然とそれを認めるであろうことをあらかじめ知っていたからであり、抗議しても自分が不利を蒙らないことを判っていたからである。すると、池田教授は述べる。

さらに教授は、少年がそのような言動に出たのは、彼がそのような「空気」の中で育ったからであり、自分が特別な行動をとったとは考えていなかったに違いない。

続いて「それとは異つた「空気」の中に育った東洋の留学生の頭にだけ、それが出来事として印象され、四半世紀を経てもなお忘れられないというに過ぎない」と結ぶ。

先生にたいして生徒が堂々

と文句をつけ、先生がおのれの非を認めて謝るといふ事態は、わが国の現在の中・高校において、はたして見られるだろうか。

この問題はイギリスと日本の「空気」について考える上で極めて重要であるだろう。

一、「空気」とは何か

空気とは何かについて『広辞苑』を捲つてみると、「①地球を包んでいる無色透明の気体。②その場の気分。雰囲気」とあり、例として「険悪な空気を挙げている。

空気がなければ生物は生きてゆけない。呼吸ができないからである。この空気は①に属する。これにたいして「険悪な空気」は人間にとつてない方がいい。「良好な空気」とは反対の位置を占めるだろう。「険悪な空気」は②の意味の空気を毀すはたらきをするだろうからだ。

『朝日新聞』の「天声人語」が「空気」について興味深い記事を載せている(平成二七年九月二六日)。

新国立競技場の建設計画は周知のとおり甲論乙駁を重ねたのちに白紙撤回されたが、その議論にあつては、すべての重要な決定が、「やむをえない」という「空気」を醸成することによって行われていたのだという。

この「空気」は「何となく何物かに押されつつ、ずるずると」という状況を意味する。「何物かに押されて、ずるず

ここでの「空気」をさしずめ「文化」と言い換えることも可能ではあるまいか。

ここでの文化とは、その社会がもつ「思考と行動の様式」としておこう。文化人類学の考え方に近いフレームワークである。

丸山氏は太平洋戦争に突入した際の日本の指導者について論じているのだが、ナチス・ドイツの指導者は開戦への決断をはっきり意識していたのにたいして、日本では我こそが戦争を起こしたという意識を持つ指導者がいなかった。

だから日本では主體的な責任意識が成立するのが難しいのではないかと断ずる丸山氏は、こうした政治のあり方を「無責任の体系」と呼ぶ(『丸山真実全集』第三巻、岩波書店一九九二)。

「やむをえない」という「空気」は実際太平洋戦争中の指揮官の判断をも左右していた。アメリカ軍の激烈な攻撃力によって押し詰められた日本軍が最後に採った手段は「特攻」であった。特攻とは「特別攻撃」のことであり、特攻隊の隊員はみずから操縦する戦闘機に魚雷または爆弾を積んで相手の艦に体当たりし、自爆を遂げることである。

特攻については栗原俊雄著『特攻—戦争と日本人—』(中

公新書、二〇一五) に詳しい。ここでは「空気」についてだけ触れよう。

一九四四年(昭和一九)九月、ときの連合艦隊司令長官豊田副武海軍大將はフイリピンで戦っていた大西瀧治郎海軍中將と会った。このとき日本海軍航空隊では、ベテラン飛行士はほとんど戦死し、訓練不十分の若者だけしか残っていない状況下にあった。

大西氏は豊田氏に言った。「中には単独飛行がやっつとせという搭乗員が沢山いる。こういう者が雷撃爆撃をやっても、ただ被害が多いだけでとても成果は挙げられない。どうしても体当たりで行くより外に方法はないと思う」と。大西は続けた。「しかしこれは上級の者から強制命令でやれということはどうしても言えぬ。そういう「空気」になつて来なくては実行できない」(八九頁)。

ここでも若者を死に追いやるためには「やむおえない」という「空気」の醸成が不可欠であったのである。

評論家の山本七平氏はかつてかく述べていた。「空気」という言葉は一つの「絶対的権威」の如くに至るところに顔を出して、驚くべき力を振っているのに気づく。「非難はあるが、当時の会議の空気では……」、「議場のあのときの空気から……」、「あの頃の社会全般の空気も知らずに批判されても……」、「その場の空気も知らずに偉そうなことをいうな」等々々

『「空気」の研究』文春文庫、一九八三)。

二、仏教者(宗教者)

山本七平氏が『「空気」の研究』を刊行してから約三〇年が過ぎた。氏が「空気」という言葉に籠めた「驚くべき力」は今日の日本でもどのような役割を果たしているのだろうか。

さきに私は「空気」を「文化Ⅱその社会がもつ思考と行動の様式」と言い換えることも可能であろうとした。さらすにくだいて「社会的な雰囲気」とすることもできよう。

以下では戦後七〇年の間に仏教者と仏教教団が示した主な行動について概観しよう。

資料は宗教紙『中外日報』が特集した「戦後の宗教界」(全四頁)である。

昭和二〇年(一九四五)八月一五日のポツダム宣言受諾は、負けることを薄うす感じていた日本人にとつても驚天動地の大事件であった。

八月一五日、まさに敗戦当日に文部省は各宗派管長にたいし、「聖旨」に従い教師・信徒に指導するよう訓令を出している。「聖旨」とは昭和天皇の「大東亜戦争終結に関する詔書」に示された内容を意味しよう。

同二八日には本願寺派勝如法主が門末にたいして「承詔必謹」の下、国体を護持し奉り、新しき日本の建設に報恩感謝の懇念を」との「消息」を発

について、山本氏の記した事例に頷く人は決して少なくはあるまい。

にとつての「空気」

「承詔必謹」という語は多分戦中語であり今日では辞書にも出ていないが、「天皇の仰せに従って必ず実践する」ということであろうか。

昭和二一年(一九四六)一月三一日には、本願寺派が戦争に關係した法規を全面廃止している。そして翌二二年五月五日には築地本願寺において全日本宗教学平和会議を開催し、宗教平和宣言を決定した。

戦時中の本願寺派は親鸞聖人の著書などに不敬と見なされる字句があるとこれを削除し、加えて聖人の神祇不拝の教えに反して、宗門寺院に神官大麻を奉安するよう指示を出している。時代の「空気」を読むのが実に速くかつ適確であるのに驚く。

宗門内にはきつと「時流」を読むのに鋭敏な人物がいたに違いない。もつともこれはなにも本願寺派に特有の事象ではなく、どの宗門も時代の情勢には抗えず「ずるずる」と戦争に加勢していったように思う。

昭和二五年六月二五日に朝鮮戦争が始まり、この頃から日本の経済・景気が急上昇したとされている。朝鮮戦争景気と言われた。

この年以降目立つのは、各教団で、もしくは合同主催で

「戦没者の追悼と平和を祈願する集会」が増加したことがある。

一月一六日には神・仏・基合同主催の「在外死没者合同慰霊祭」が日比谷公会堂で営まれた。

「戦陣に散り戦禍に斃れた人びと」という表現はこの頃より広く使用され、今日に至っているように思う。

戦後一五年目の昭和三〇年(一九五五)には、厚生省主催で南太平洋における戦没者遺骨追悼式が日本青年館で行われ、続いて日本宗教学連盟等の共催で合同慰霊祭があった。

本願寺派と並んで戦争反対・平和希求の運動に熱心だったのは日蓮宗である。同宗は昭和三四年(一九五九)八月に戦没者追悼法要を千鳥ヶ淵戦没者墓苑で営み、三六年八月には米ソ両国に核実験停止要望書を出している。

全日本仏教会(以下全日仏)の活動も目立つ。全日仏は昭和三八年(一九六三)八月に、南ベトナムの仏教徒弾圧にたいし大統領に抗議書を出し、四〇年(一九六五)三月には、ベトナム戦争犠牲者追悼法要を営んだ。

昭和四〇年代には靖国神社法案に反対する運動が本願寺派、大谷派、全日仏に目立つ。この傾向は平成時代に入っても変わらない。

曹洞宗は『中外』の「戦後の宗教界」にあまり顔を出さない。他宗・他派のように「空気」に敏感でなかった故であろうか。唯一目立つのは、平

成四年(一九九二)の『曹洞宗海外伝道史』に民族差別表現があるとしてこれを回収・破棄し、戦争協力にたいする責任を認めた「懺謝文」を出したことがある。

平成六七年(一九九四、五)には、太平洋戦争五〇年になるため、浄土宗、本願寺派、大谷派、真言宗、日蓮宗などが全戦争犠牲者追悼平和法要、戦争への懺悔、不戦決議などを行つている。

平成一〇年(一九九八)五月には本願寺派がインド、パキスタンの首相宛に核実験への抗議文を送った。同一三年(二〇〇一)一月一日に浄土宗は「二一世紀劈頭宣言」を発し、国家間の対立などを解消し「共生」を目指せと強調。平成一五年三月に米英軍のイラク攻撃に際しては大谷派が攻撃前に、そして後には各派も反対表明をした。

平成二七年(二〇一五)六月には、大谷派宗議会議が戦後七〇年を機に改めて非戦を誓う「非戦決議」を採択。

六月九日、衆議院本会議で「安保法案」が強行採決されると、大谷派、妙心寺派などが抗議声明を出した。また各教団が長崎、広島などで戦争犠牲者の慰霊・追悼法要を営んだ。

以上、紙幅の都合もあつて端折りにしよつた「仏教者と「空気」論をものしてきたが、不十分であることを認めざるを得ない。

ごく大雑把な言い方をすると、仏教者・宗門(宗派)の動きは、新しい「空気」を「創り出す」というよりは「時の」

空気に乗っかり適応するといふ性格を示しているようである。

時流に敏感に反応するのと、鈍感に対応するのとの差はあれ、概して諸教団の対応の仕方は時代の空気にたいして能動的であるより「受動的」であるかに見える。

今の国は右傾化の歩みを強め、何やらきな臭い空気を醸しだしている観がある。『朝日新聞』によると「文化の日」を「明治の日」に改めようとする祝日法改正運動が一部で熱を帯びてきているそうだ(二〇月二二日夕刊)。戦前の国家神道的な社会を論じているのだろうか。一月三日の菊薫る日は「文化の日」と呼ぶ方がそが相応しいではないか。

世間の「空気」が争乱よりも平和を願うようになると、今日こそ仏教者は声を大にして語り、説き、かつ行動すべきときではないか。右寄りの空気が「何物かに押されて、ずるずると」強まり、人びとが「やむを得ない」と感じだすことのないように、お互い十分に留意すべき時ではないか。

釈尊の言葉、「すべてのものは暴力に脅え、死を恐れるわが身にひきあてて、殺してはならない。殺させてはならない。すべてのものは暴力に脅えている。すべての生き物にとつて、生命は愛しいわが身にひきあてて、殺してはならない。殺させてはならない」(『ダンマパダ』一二九、一三〇)。

丸山劫外師インタビュー

『修証』のこと、住職として思うこと

聞き手・藤木隆宣

生を明らめ死を明らめるとは

【藤木】 このたび、『曹洞禅グ
ラフ』に連載していただいた『修
証義』解説が単行本として刊行
されることになりました。これ
は連載中から好評でございまし
て、こういう解説は初めて読ん
だとか、途中で読んだ読者から
はバックナンバーがほしいと
か、その辺は、読者の生き方の
中で感ずるものがあつたと思っ
てですね。そこで今日はまず『修
証義』のお話あたりから始めて
はと思います。

を明らめ死を明らむるは仏家一
大事の因縁なり、「生死即ち涅
槃と心得て」という、ここが一
番私にとつて難しいです。それ
はずつと思つていて、ここさえ
分かれれば、何とか僧侶になれ
たと言えるのではないかとさえ
思つています。やっぱり生死を、
生き死にを明らかにする、命を
分かるということが一大事因縁
だと思つています。

これが分かれば悟れるといひ
ますか、悟りはないと言ふ人が
いますけれど、道元禅師様は、
悟りはあるとおっしゃつておら
れます。中国の禅僧の語録や
史伝を読んでいますと、必ずと
言つてよいほど「省」有りとい

うことが出てきます。省(さと)
りありですね。臨済宗のほうで
は印可証明という事を言うよう
ですが、曹洞宗では深く学んだ
方ほど悟りはないよとおっしゃ
います。未熟な修行者が「悟
り病」に陥ることを心配なさつ
ておっしゃつておられるのではな
いと思ひます。道元禅師ご自身
は悟つたとはおっしゃつていま
せんが、「悟りあり」とお書き
になつていらつしやいます。
それは「生を明らめ死を明らむ
るは仏家一大事の因縁なり」と
いう、この言葉で非常に強く思
います。このことが分かれば、
本当にこの生死をあきらめるこ
とこそ、まさに一大事因縁、悟
り(私は寛りの字のほうを使ひ
たいのです)を開きかけで
はないかと思ひます。



丸山劫外師

もし、生きつきりだつたらど
うか、死につきりだつたらどう
かと考えてみたら、人生は少し
も輝きがないと言つたらいいで
しょうか。命はありがたくも何
ともないと言つたらいいでしょ
うか。また生と死と対立するよ
うにとらえるのではなく、生と
死と一つということではないで
しょうか。生きることを有難い
のだという、死ぬことも有難い
のだということをおぼえて思つ
ています。

輝くという言葉はちよつと抵
抗があるというか、難しいとこ
ろですね。輝くという言葉の間違
うと、例えば芸能人になつてキ
ラキラすることを連想してしま
う。

【藤木】 あるいはお金がたくさ
ん入つて、楽に人生が送れると
か。一般の方々にとつては多分
そうでしょうね。

【丸山】 輝くということはその
ではなくて、しみじみと内なる
何か、それが現れてくる。ただ
外面がきらびやかであるという
ことは当然違いますね。阿弥
陀様の光背、仏様の光背とい
うのは内側から発している、隠し
ようがなく出ているのであつ
て、表面だけがキラキラ輝いて
いるのではない。それが誤解さ
れやすいのは、あるいはテレビ
がお茶の間に入り過ぎたことに
よる罪かもしれません。もちろ
ん功罪ありで、功もありますよ、
テレビのおかげでいろんなこと
を知るといふ功もあります。若
い人たちがコツコツと生きる

大内青巒居士のこと

【藤木】 その「修証義」ですが、
明治時代から随分批判をされて
きたとのこと。

【丸山】 そうですね、やっぱり
坐禅のことが書かれていない
ことが一番の問題視されるとこ
ろだと思ひます。でも、私はこ
の『修証義』解説を書き終わり
まして改めて考えたことは、坐
禅のことが書いてなくて、これ
で良いのではないだろうかとい
うことです。よくご存知のよう
に、難解な道元禅師の『正法眼

生き方を振り向きもしないで、
安直に走つているように思えて
なりません。

本当の芸人さんはコツコツと
修業していますね。例えば、私
も落語界の方々と縁があります
けれど、その方々がどんなにコ
ツコツと努力なさつておられるか。
一朝一夕にはいかにない世界で
す、まさに「芸を磨く」「芸は
磨かれる」そして輝くというこ
とですよ。

【藤木】 テレビに映るのは上手
でも下手でも、その一番いいと
ころをばつと出しますので、努
力の過程は見せてくれません
ね。

【丸山】 そうです、見えないと
ころでどれだけ努力しているか
ということ、本当に思ひます。
何かなし遂げている人は、見え
ないところでどれだけ深くやつ
ているか、そこが分かるように
なつてくると、自分の人生がだ
んだん面白くなる。そこからが
スタートじゃないかなと思ひま
すね。

蔵』のエッセンスを、僧侶でな
い方々でも少しでも理解できる
ようにと、大内青巒居士によつ
てまとめられたものが『修証義』
です。だからもともと、在家の
方々を対象にした経典なのです
ね。それをさらに、当時の永平
寺貫首・滝谷琢宗禅師と總持
寺貫主の畔上棟仙禅師とによつ
てさらに検討され、明治二十三
年に『曹洞教会修証義』として
公布されたわけですね。

ところが、滝谷禅師が亡くな
られた明治三十一年にはすでに
批判が公けになされていまして。
『修証義』なるものはその根底
より破壊すべき、などと書いた
論文もある。でも私は、お二人
の禅師様が修正されたときに坐
禅のことをお入れにならなかつ
たのは、そこに何かお考えがあ
つたと思つておられるんです。
【藤木】 そうですね、そういう
気はいたします。

【丸山】 私も最初は、坐禅のこ
とが書いてない、これは曹洞宗
のお経としては、おかしいので
はないか。道元禅師は坐禅こそ
が大事だと、正法の根本は坐禅
にありと言われた。修証一等等
いうのは、坐禅を修行している
ところに悟りが現われていると
いいますか、坐禅の姿そのもの
が悟りだというぐらゐの教えな
のに、坐禅のことが入つていな
いのはおかしいと思ひました。
けれども、『修証義』解説を最
後まで書かせていただいて、曹
洞宗の教典として大事にした
と強く思ひました。また、坐禅
が大事だということをお説きす
べきという場合、そのような趣旨
の経典を作成しては、どうかと、
こう思ふようになっていまして。
やはり救つてもらいたいの
は、僧侶よりも在家の方々に
です。僧侶は自分で一生懸命修行
できます。いくらでも仏教を学
ぶチャンスはあります。それ
が、在家の方々にとつて、よす
がというものは、『修証義』が
一番でしょう。ですから、在家
の方の信仰を深めていただくた
めに、これからも説いていくべ
きだし、道を究めた老師様たち
に説いて頂きたいと思ひます。
解説者として本当に私では十分

ではないので、もつとよく分かっていての方々に、『修証義』を批判するよりも大事にして頂きたいと、『修証義』の解説が終った今になって思います。

大内青巒という人は一度出家してはいますね、お考えがあつて還俗なさり、のち東洋大の学長にもなりましたが、仏教の大衆化と社会福祉につとめ、言論界で活躍なさいました。宗教法人の中の一僧侶という枠を外して自由に仏教と取り組みたかつた

腐らずに生きれば道は開く

【藤木】 『修証義』から離れませんが、住職になられてからの話をうかがいたいと思います。ここ武野山吉祥院は宝暦八年(一七五八)開山の由緒あるお寺とのこと、まずここに入りたいきさつあたりから。

【丸山】 たまたま、この寺で住職を募集していました。

【藤木】 住職の募集ですか。

【丸山】 そうです、この前住職は東京のお寺に住んでいました、ここは兼務寺でした。それで同じ組寺の教区の人に、誰か吉祥院の住職になる人はいないでしょうかと声をかけていたのだそうです。その教区の尼僧さんが、駒澤大学の石井修道先生のゼミで一緒だったものだから、「丸山さん、所沢の寺で住職を探しているけど、なる気ないですか」と一声声をかけてくださつたのです。所沢といえは兄が住んでいます。正直言います、母親思いの兄のためにも、母は私が引き取っているのですが、母の最期には間に合わせて

のだと思いますが、宗教的天才という言い方を許してもらえらば、そうだと思います。本當の宗教家であり、人々を救いたいという熱い誓願があつたと思います。

また、「禪戒一如」とか難しいことを言いますが、『修証義』は戒は説いています。ですから『修証義』は「禪戒一如」だからよいのだということをつたりします。「禪戒一如」という考えは江戸宗学から出てきた理論ですが。

あげたいという思いもありまして、心を動かしたのがはじめです。どのようなお寺か全くわかりませんが、私ではいかにしようかと名乗り出たわけですね。

ちょうど私が『曹洞宗報』の巻頭言などを書かせて頂いたり、「中外日報」に連載記事を書かせて頂いたりしていた時でしたが、このお寺の先々代である山根壽隆老師は、ご覧になっておられたようで信頼して下さいます。すでに若くはないのですが、そのことも「丸山さん、吉祥院の開山様もかなり歳をとつてから、吉祥院を開いているのだから、問題はありませぬ」ときつぱりとおっしゃつて励まして下さいました。また勿論先代のご住職も認めて下さつて、この縁ができたということですね。とにかく、私は引退して楽々生きようと思つていたところに、この縁をいただいて、やっぱり僧侶としてもう少し頑張つてみようと思つたわ



けです。

実は、この寺に、私が住職候補として名乗り出る前に、候補になつた方がお一人いたということ、それを後から知りま

した。たまたまこの組寺のいろいろな仕事でその方と会うことになつて、こんなに爽やかな青年僧がどうしてここを断られたのかと、すごく疑問でした。私よりも適任ではないかと思つたほどの方です。しかし、この方は、丸山さんになつてよかつた、自分には縁がなかつたと思つて

ますなどと言つて下さつて、その感じが清々しいのです。その方はその後間もなく、別なお寺のご住職になりました。千軒近くも檀家さんのある大寺の住職です。ですから、その人はここを断られたことによつて、別の道が開けたわけですね。別の道が開くために、こちらは閉じたのかもかもしれません。その方は、いつも爽やかでしたし、今ももちろん爽やかです。自分の思うとおりにならないと、腐つてしまつて、ごねたりする人が時々いますが、潔く自分の状況を受

けた時、別の道が必ず開けるといふ事を私は常々思つていますが、この方はまさにその通りであることを見せて下さいました。

【藤木】 なるほど。そこが大事なところですね。

【丸山】 別に大寺の住職になつたからどうということではないですが、そういうふうには、その人に合つた道が開けてくるのではないのでしょうか。どんなことがあつても、誰にでも、自分に開いた道が自分に合つた道ではないでしょうか。縁ですね。その縁から逃げようとするよりも、開いた縁はいかに困難でも受けて立つて行く、ということも大事だと思つています。

合格しなくても、それは自分に向いていなかったと思えばよいのではないのでしょうか。ただ、試験を受けるまでは努力しなくてはと思います。あとは天任せ、「人事を尽して天命を待つ」、素晴らしい言葉だと思います。天命が開かなかつたら、これは他が向いていないと、これは閉ざしたと、こう思つて、次に向かつて努力すればよいのではないのでしょうか。長い目で見たときに、閉ざされた道と開いた道がよく見えるようになります。

私は今、お寺にとつても重大な問題を経験しています。ある若者が、一度得た権利にしがみ

葬儀にそれほど費用がかかるのか

つき執着して、信頼を築くことのほうに尽力しない姿を見させてもらいました。閉じた扉を無理やり開けようとするよりも、潔く踵を返して振り返つたら、他の道が必ずその潔さに感応して開けるといふのに、執着は、残念ながら、他の道に通じる扉さえ閉ざしてしまふことでしょう。

権利の主張よりも、信頼を築くことに努力し、潔く生きる、清々しく生きるということには、若い人たちに、ぜひとも伝えていかなければならないメッセージだと思つています。

【丸山】 私、住職になりました。大変勉強になりました。まず自分一人では何もできないし、自分一人では駄目だということなんです。常にみんなと話し合う。この寺に入つてからわずか三年ですが、総代会が何回あつたか、五十回以上ありますね。もう話し合い話し合い、ずつと記録も取つてあります。私がやりたいことも、皆さんのバックアップがあつて初めてできます。檀家さんも反発をしな

い受けて入れて下さる。さきほど言つたように、この寺は兼務寺で無住に近かつたものから、その分、総代さんたちがしつかり守つてくれていたわけです。

今は皆さん、総代さんの二代目になつています。初代の総代さんたちは、いわゆる普風で、頑固一徹という感じでこの寺を

とが言えるようになりまし。私、葬式仏教と言われていたことに、反対というか、反発といますか、何かちよつとおかしいのではないかと考えを持っています。葬儀屋さんに払うお金とお寺へのお布施を一緒にしてしまつて、葬儀には莫大な費用が掛かるというイメージを皆さんが持っているというところですね。

僧侶がそんなに法外なお布施をはたして要求するのでしょうか。自分もこの住職となりましてから、そんなひどい金額を要求することは絶対ありません。この間も生活保護の方に頼まれて、もうそれはいいですよと、交通費だけ頂けば結構ですと申し上げた。そんなですからね、法外なことはいけません。

それでもちゃんと檀家の方々は、お寺が維持できるようにと、それなりにお布施をくださいます。では、葬儀屋さんはどうなのだろうかということを考えました。この所沢の葬儀屋さんは皆さん、良心的です。

【藤木】 そうですか。でも、一般的には葬儀屋さんとお寺さんが一体となってやりますから、どうもその辺、お寺さんにたくさん入っていると思われているでしょうね。

【丸山】 実は最近の話ですが、新しく墓所を求めたご家族の奥さまがお亡くなりになりました。お寺をつかってもよいですよ、と言ったのですが、互助会に入っていますから、ということとで、互助会が持っている東京の会館で葬儀をなさったので、私は東京までお

葬式に行きました。何だかお棺もすぐ立派で、ああ随分すごいなあと思えました。ご主人はもう退職なさっていますし、参列の方も近親の方々だけでしたが、葬儀会館で働いている人が方がやたらに多かつたくらいでした。それで、恐縮ながら、どのぐらいかかりましたかと聞いたんです。そういうことは普通聞かないものでしょう、初めてでした。実は私の母も数えの百歳ですから、もういつ何時葬儀屋さんの世話にならなさいいけない時が来ると思つて、思い切つてお聞きしました。なんと四百万円近くでした。私にはびっくりする金額です。

その人もびっくりしたと言います。もし、僧侶も葬儀屋さんに依頼すると、私が頂いたお布施の倍と言われたそうです。

ただ、檀家さんたちにもわかつていただきたいことは、お寺を維持管理するには、相応の経費がかかりますし、僧侶も霞を食べては生きていけませんから、相応のお布施は頂戴いたします。

それと是非知つてほしいことは、キリスト教社会では「十分の一税」といって、お給料の一分は教会に納めている教会員もいますし、十分の一ほどでなくても、教会税は認められていて、毎月かなりの献金を教会にしているのです。ですから葬儀のときに限つて多額に納めなくても十分に教会は資金があるので、また、葬儀場を使わないで、ほとんど教会を会場にしますから、葬儀屋さんに多額の支払いも生じないのです。

このようにも知つてほしいと思つたのです。これはアメリカ人の友人から教えてもらつて、私もはじめて知つたことです。葬式仏教という失礼な言い方をぜひやめていただきたい、と思つていますし、そんなことを声高に

住職は寺の所有者ではない

【丸山】 とにかく、お寺は檀家さんと住職が守り合つていく大切な場であるということとです。このことを本当にしみじみと思つています。それで檀家さんたちにも、お布施を頂戴する時には、大切に使用していただきますと言つていただいていますし、勿論ご本尊様に差し上げてから使わせていただいています。本当に大切に使用してあります。ただ、出るほうも目に見えてたくさん出ていくんですね、驚くほど。だから、お寺の建物はお金掛からないだろうと、もしかしたら檀家さんたちは思っているかもしれないですが、ところが、あちこちの修理やら植木の手入れやら、台風で瓦がとんでしまひ、客殿の瓦を葺き替えたり、とにかくお金はたくさん出ていきます。

そんなことをいちいち言つてもしょうがないことですが、もしも、そこは住職を信頼してもらつて、お布施はそれなりに納めていただいて、みんなで守り合つていこうということとです。その住職が信頼を受けるといことが、すくく大事ですね。この三年の間に、皆さんと培つた信頼によつて、実はこれも三年目にして参道を拡張することが

言っている学者の人やいわゆる知識人という人たちもいます。が、きちんとこのようなことを認識してもらいたいと思つています。

できました。ここは国道沿いであるけれども、入り口が狭くて分からなくて通り過ぎて行つてしまふ。私も住職になりたての時には、つい通り過ぎてしまったことがありまして、できれば塀も作りたいたいと思つていました。

それが、たまたま寺の前の土地が売りに出るような事態になつたので、これはこの機会を逃したら門前を広げるチャンスがなくなると思い、その土地の所有者は檀家さんでしたが、思い切つてお願いに行きました。その方にとっては、国道沿いの土地を国道沿いではない寺の土地と交換するというのは全く得な話ではありませぬ。でも快く応じてくださつて、そのおかげで願いのよう目立つような白い塀をかけることができましたし、門柱も新しくすることができました。もとの門柱はひよる長くて、頭上に帽子のような石が載つていて、地震のたびに倒れるのではないかと危険を感じていたんです。お寺の百年の計のためだと思えば、勇氣もできます。

とにかく住職は、決してお寺の所有者ではないということと、これを間違つたら檀家さん

の信頼を受けないだろうと思つています。しかし、それは自分が入つてみて、初めてこの一歩一歩が分かることであつて、何でも具体的にやらないと分らないことは多いですね。そして、人を立てるといふことの実際の学びにもなり、頭を下げるという実際の学びにもなります。自分個人のために生きてるときは、やたらに頭は下げない、へつらわれない、などと思つて生きていられたら。勿論へつらう必要はありませんが、お寺のためならば、頭も下げます。

それから、話は変わりますが、ご法事のあるたびに、その家の子供さんの名前から全部控えておいて、このうちにはこういう子がいるな、名前はこうだと覚えていきます。

【藤木】 なるほど。過去帳でなく現在帳ですか。

【丸山】 はい。住職と檀家さんが本当に近づくために、そういうことは大事じゃないかと思うのです。法事を勤める場合もその家族はどのような家族構成とか、もしかしたらなにか問題を今かかえているかもしれない。それぞれがどういう立場であるかということを知るように努めています。ただし、根掘

り葉掘り聞くような失礼はいたしません。感じ取るのです。そういうことはすくく大事だと思つています。ただ型どりの法事をするのではない。型どりのお葬式じゃなくて、一人一人のお葬式、その人その人その家の法事と言いますか、僧侶として目の前の人を大事にすることを心がけています。それは私、住職になる前から心掛けてきたことで、実は亡くなられた長井龍道老師から教えていただいたことなんです。

私はあの世のことを信じていますので、経験を通して「ある」と考えています。ですから、法事は大切だと思つています。だから私は、檀家さんの一人一人が歩んだ人生を思うわけです。この私と檀家さんが接する、表面的だけにではなくて、いつもその檀家さんがどんな人生を歩んできたかということをお偲びながら接しているんです。

僧侶のお役は、真ん中において、仏界と現界の人々との間を取り持つ役と考えています。私が直接、あの世に行った人たちに語り掛けはできないと思つていますが、仏菩薩を通して、初めて伝えていただけるのではないかとと思つています。

仏菩薩の世界と霊世界

【藤木】 それは檀家の方にとつては、大変ありがたいご住職だと思つていますね。次の世に行く時に導師として、導き手として安心できる、信頼を得られるでしょう。

【丸山】 いえ、導き手とはいえないませんが、ただ私がああ世に行つた時に、方丈さんにはあの時、話しかけてもらつて救われたと、お一人にでも言つてもらえれば有難いと思つています。お経をあげる時も、私はあの世にお届けしますという気持ちで

あげます。 仏菩薩の向こう側にあの世の人たちがいるというよりは、こつち側にいるといつたらよいでしょうか。

【藤木】 なるほど。ここからこつちですね。

【丸山】 ええ、あの世です。仏菩薩は仏界ですね。あの世という表現も難しい、霊界というか。過去世、現在世、未来世ではなくて、現在世におけるあの世といつたらよいでしょうか。次元は違いますが。

【藤木】 表現すると難しいですね。またいろいろと異論が出てくる。

【丸山】 いろんなお考えがあつて、とくに曹洞宗は霊を認めておりませんので。

【藤木】 認めてないですね。そういう霊界というか、そういうものを認めないと何のためにお経を読むのか、何のための仏行事か、実を言うとなんか分からなくなつてきます。

【丸山】 この世の人のための気持ちを休めるためと思つていたりもするのではないのでしょうか。そうしますと、やらなくてもいいなどということ言う人さえでてきてしまいます。

【藤木】 そうなんです。だから、その辺が曹洞宗の教学的にも教育的にも弱いところと思つています。

【丸山】 他の宗派ではもっと強く、このことを平気で言うでしょう。これはもう少し理論的に話せるといんですが、長井(龍道) 老師はそれがおできになつた。理論的なバックアップがないと、霊的な話はとても難しいですね。私は経験したから、

表現はおかしいですが、やむを得ずそういうことはある、と肯定せざるをえないわけです。新宗教は多く霊能者という存在があつて、その働きと信仰と結びつけている傾向がありますね。信者さんたちにとつて、信仰に入りやすくもあり、教祖のほうでも導きやすいということもいえるでしょう。ただ私個人としては、坐禅をし、コツコツと地道に学んでいくことの方を選ばせてもらいましたので、霊能者にならないですんだといえますが。

合、どういう角度から話せば少しは受け入れていただけなのか、これは霊的な問題だけでなく、すべてそうですね。例えば自分よりも若くて経験不足の人を説得するような時、押し付けるように教えるのではなく、分かつていない人には噛み砕くように教えることも大事です。し、相手のプライドを傷つけるようなやり方、これはやってはいけないと思います。でも、すごい人であつても気がつかないところで相手に恨みをもたれることもあるでしょうし、こうすればいいと一概に言えないので、なかなか難しいところですね。

僧侶になるまでの奇縁

【丸山】 奈良に大倭紫陽花邑というところがあります。そこに矢追日聖法主様という大霊能者がいらつしやつて、聖徳太子と年中霊界で会つていてという方でしたが、多くの人を救つた方でした。当時の奈良市長さんは鍵田忠三郎という方でしたが、法主様のことは認めていません。市立病院をそこに建てたり、たくさん福祉施設も市から委託されています。因みに私は若いころには鍵田さんの道場にも坐禅に通つたことがあります。

しゃつていました。残念ながら平成八年にお亡くなりになりました。私の本師、余語翠巖老師も同じ年に遷化されました。

【丸山】 奈良に大倭紫陽花邑というところがあります。そこに矢追日聖法主様という大霊能者がいらつしやつて、聖徳太子と年中霊界で会つていてという方でしたが、多くの人を救つた方でした。当時の奈良市長さんは鍵田忠三郎という方でしたが、法主様のことは認めていません。市立病院をそこに建てたり、たくさん福祉施設も市から委託されています。因みに私は若いころには鍵田さんの道場にも坐禅に通つたことがあります。

日本にはいろんなところに神社がありますが、神社には荒ぶる霊がたくさんまつられていて、荒ぶる霊の魂鎮めに日本全国を歩いていらつしやいます。荒ぶる霊を抑えないと、その土地で争いが絶えないとおつ

合、どうい角度から話せば少しは受け入れていただけなのか、これは霊的な問題だけでなく、すべてそうですね。例えば自分よりも若くて経験不足の人を説得するような時、押し付けるように教えるのではなく、分かつていない人には噛み砕くように教えることも大事です。し、相手のプライドを傷つけるようなやり方、これはやってはいけないと思います。でも、すごい人であつても気がつかないところで相手に恨みをもたれることもあるでしょうし、こうすればいいと一概に言えないので、なかなか難しいところですね。

【丸山】 いえ、もつと前に、こんなこともありました。二十五歳頃、十五日間の旅行で韓国へ行きました。朴正熙大統領の戒厳令下のソウルです、サイレンが鳴ると、みんな建物の中へ入らなくてはなりません。ソウルから、大邱という町へ行き、大邱からバスで奥に入った海印寺というお寺にお参りに行きました。その時はまだ有髪ですし、お寺にあまり興味はありませんでしたが、ただホテルの人のすすめのままに行つてみました。伽藍の上の方に倉庫のようなところがありまして、僧侶が二人見張りをしている感じでした。私を見ますと、日本から来たのかと聞かれ、そうだと答えました。中に招きよせてくれました。中に陳列してある版木を持たせてくれたんです。それは海印寺の高麗八万大蔵経の版木でした。今になってみれば、海印寺版八万大蔵経がどんな素晴らしいものか分かりますが、その時点で全く知りませんでした。さらに、海印寺の境内を歩いているときですが、大きな石塔が二基ありまして、その下を通

りましたら、石塔についている鈴が一斉に突然なつたのです。私はその時、かつてここにいたことがあると突然思いました。デジャヴというのでしょうか、私はかつてこの僧侶だつた、そういう感覚を得たんです。その不思議な感覚は今でも忘れられません。四〇年以上前のことですが。

【藤木】 僧侶になろうと思つたのはその時ですか。

【丸山】 ええ、もつと前に、この頃、十五日間の旅行で韓国へ行きました。朴正熙大統領の戒厳令下のソウルです、サイレンが鳴ると、みんな建物の中へ入らなくてはなりません。ソウルから、大邱という町へ行き、大邱からバスで奥に入った海印寺というお寺にお参りに行きました。その時はまだ有髪ですし、お寺にあまり興味はありませんでしたが、ただホテルの人のすすめのままに行つてみました。伽藍の上の方に倉庫のようなところがありまして、僧侶が二人見張りをしている感じでした。私を見ますと、日本から来たのかと聞かれ、そうだと答えました。中に招きよせてくれました。中に陳列してある版木を持たせてくれたんです。それは海印寺の高麗八万大蔵経の版木でした。今になってみれば、海印寺版八万大蔵経がどんな素晴らしいものか分かりますが、その時点で全く知りませんでした。さらに、海印寺の境内を歩いているときですが、大きな石塔が二基ありまして、その下を通

りましたら、石塔についている鈴が一斉に突然なつたのです。私はその時、かつてここにいたことがあると突然思いました。デジャヴというのでしょうか、私はかつてこの僧侶だつた、そういう感覚を得たんです。その不思議な感覚は今でも忘れられません。四〇年以上前のことですが。

その後、私がシナリオライターの修業をしていた頃ですが、『旅の重さ』という映画がありまして、その映画に触発されてお四国参りに出たのです。そこで坊さんに出会いましたが、その人は私に、坊さんにならなかと勧められました。その時は海印寺のこととは忘れていたんでしょね、別に坊さん

【藤木】 今は高齢社会というところで、私もその中に入つてしまいました。お年寄りが老後をどう生きるか、その辺のことをお檀家にどんなふうにお話をされていきますか。

【丸山】 老後の生き方ですね。私の本師の余語翠巖老師は口癖のように「余生なんておかし、よく余生とかいうけれど、余つた人生なんてあるのか」とおつしやつていました。今、私も七〇を目前にして、そう思うようになりまして。若いときには、特別気にしていませんでしたが、自分が年齢を重ねますと、余つた人生なんてないな、という感じがよく分かります。ですから、海印寺の境内を歩いているときですが、大きな石塔が二基ありまして、その下を通

りましたら、石塔についている鈴が一斉に突然なつたのです。私はその時、かつてここにいたことがあると突然思いました。デジャヴというのでしょうか、私はかつてこの僧侶だつた、そういう感覚を得たんです。その不思議な感覚は今でも忘れられません。四〇年以上前のことですが。

高齢社会を生きていくために

なるうという気はその時はありませんでした。また話は飛ぶんですけれども。 【藤木】 はい。構いません。 【丸山】 僧侶になつてから、新潟の小千谷にある本家へお参りに行きました。その時に、お四国で坊さんにならないかとすすめてくれた人と同じ名前のお墓があつた。卵塔ではなくて、自然石にその名前は刻まれていました。 【藤木】 その方は曹洞宗の方でしたか。 【丸山】 そうです、うちの本家も曹洞宗です。私は私の強い意志で出家したと思つていましたが、見えざる世界の願いもあつて導かれたのだから、と今では素直に思つています。

いつ死んでもいいように、誠を尽くしていきましよう、当然のことです。お坊さんだけ話していません。お坊さんだけ「死」を話題にしても許される存在だと思つたので、いかに生きるか、いかに死んでいくかというようなことを話します。

【藤木】 いや、大事なことだと思つてますね。 【丸山】 さつき申しましたように、私の母も今、数えて百歳です。七十から私が引き取つたという形ですが、以前はよく食事を作つてくれましたし、本師亡き後、駒澤の大学院に入りましたが、その時は、中国からの留学生の友人の分まで、毎日お弁当を作つてくれるほどでし

りましたら、石塔についている鈴が一斉に突然なつたのです。私はその時、かつてここにいたことがあると突然思いました。デジャヴというのでしょうか、私はかつてこの僧侶だつた、そういう感覚を得たんです。その不思議な感覚は今でも忘れられません。四〇年以上前のことですが。

たが、今は、ほとんど何もできなくなりまし。自分で入れ歯を洗うこともできなくなりまし。でもやっぱり、できれば子供と一緒に過ごせるほうがいいでしょう、最後まで話ができてもね。ただ私、いつも言うんですよ。どうして私のように忙しい人間が引き取っていなくてはいけないのか、私しか人手のないところよりも姉や兄の家族のところのほうがよいのじゃないかと。でも、私のところの方がいいと言いますので、これが私に開かれた縁なんでしょう。この縁からは逃げられません。

縁はもう閉じた、どうしても開かないという場合があります。そうして、そういう閉ざされたところでは切り替える必要があるけれども、どんなに大変で理不尽でも、開いたところからは逃げられない。というのは、その人がそれは乗り越えるべきとか、そこで勉強するものがあるか、そこで勉強することはもちろん、自分が身にしてみても

ることがいっぱいある。それはなかなか大変ですよ、まして老介護ですから大変です。それからもう一つ、ここ所沢の土地ではみんな親を大事にするし世間体を気にする、この世間体というところが大事なのではないかとこの頃思うようになりまして。実は。

【藤木】 私もそう思います。逆のことをおっしゃる方もいますけど、世間体でもって保たれる秩序もありますね。

【丸山】 はい。みんな世間体を気にして生きていくのは嫌だといえます。仲間はずれにならないように、村八分にならないように世間体を気にする。そういうことは嫌だというけれども、実はそのおかげで、どれだけ自分の暴走する生き方を止めてもらっているか。それは窮屈かもしれないけれども、それによって守られていることがいっぱいある。決してマインスばかりではない。そういうことにふと気がついた時に、ああ、おかげさまと言えると

うんです。多くの理不尽と生きていたことに、有り難かったと言えるまで生きてもらいたいと思えます。有り難かったと言える前に、理不尽な中で死んでしまっではもったいないじゃないですか。自分で道を閉ざさないで、その理不尽な道がその人に開いたならば、何とかそれを乗り越えて行く。それは乗り越えられ、だから開いたんだよと、こ

う思ってもらいたい。それを振り返った時に、ああ、有り難かった。そう思えたならば、その後死んでもいいじゃないですか。自然の死ですよ。

【藤木】 これは大事なメッセージじゃないでしょうか。その辺るか、逃げてしまおうか、どっちかになるような気がします。

【丸山】 お師匠さんはどなたでいらっしやいますか。

【丸山】 『修証義』について一つ申したいことがあります。この解説を書いていく中で、少しでも自ら命を断つ人にストップをかけたこと、そういう思いをいっぱい入れてあるんです。これを読んでも、思いとどまってくれば有難いなど、そんなに具体的ではないかもしれないが、この中にはずっとその思いをこめて書きました。それから、お金があるばかりが幸せなのでは絶対ない。これは本当にそう思いますね。

【丸山】 お金というものは必要な時には必要なように、めぐりめぐってくるものです。私はこれも経験として思います。私は家族のために、借金を背負って何年間か苦労したことがありますが、その理不尽なことだから逃げない、これと戦う。というのは、それが私に開いた道だからです。借金を返し終わったところから、また新たな道が開けたわけですね。実は不思議とそれからお金に困ったことがありません。お話がいろいろに飛んで恐縮



まるやま・こうがい
昭和21年群馬県生。早稲田大学卒業。駒澤大学大学院博士課程満期退学。昭和57年得度（浅田大泉老師）。同年立職（浅田泰徳老師）。平成元年嗣法（余語翠巖老師）。現在所沢市吉祥院住職。曹洞宗総合研究センター特別研究員。



も、今まで生きた人生をなすにするとはいわゆる縁は大事にします。それは生きてきると思いますが、人脈といいますが、人の付き合いは大事にしていく。自分だ

けで生きていくのではないという、当然のことですけれども、お世話になった人には感謝する。今の泰徳老師もそうですけれども、私は逃げ出したにもかかわらず面倒をみてくださった。老師は人間ができていたかと思つています。嗣法の師匠は、総持寺の副貫首にもなりました。余語翠巖老師です。老師のもとで一〇年間、導いて頂きました。

【藤木】 そろそろ時間になりますが、最後に付け加えていたことがありました。

【丸山】 『修証義』について一つ申したいことがあります。この解説を書いていく中で、少しでも自ら命を断つ人にストップをかけたこと、そういう思いをいっぱい入れてあるんです。これを読んでも、思いとどまってくれば有難いなど、そんなに具体的ではないかもしれないが、この中にはずっとその思いをこめて書きました。それから、お金があるばかりが幸せなのでは絶対ない。これは本当にそう思いますね。

【藤木】 お師匠さんはどなたでいらっしやいますか。

【丸山】 『修証義』について一つ申したいことがあります。この解説を書いていく中で、少しでも自ら命を断つ人にストップをかけたこと、そういう思いをいっぱい入れてあるんです。これを読んでも、思いとどまってくれば有難いなど、そんなに具体的ではないかもしれないが、この中にはずっとその思いをこめて書きました。それから、お金があるばかりが幸せなのでは絶対ない。これは本当にそう思いますね。

【丸山】 お金というものは必要な時には必要なように、めぐりめぐってくるものです。私はこれも経験として思います。私は家族のために、借金を背負って何年間か苦労したことがありますが、その理不尽なことだから逃げない、これと戦う。というのは、それが私に開いた道だからです。借金を返し終わったところから、また新たな道が開けたわけですね。実は不思議とそれからお金に困ったことがありません。お話がいろいろに飛んで恐縮

『仏教企画通信』ご支援寺院名

Table with 3 columns: 所在地, 寺院名, 金額. Lists various temples and their contribution amounts.

合計 90,000

(H27/9/26 ~ H28/1/21)

「手まり学園」寄附者ご芳名

Table with 3 columns: 所在地, 寺院名(個人名), 金額. Lists individuals and their contribution amounts.

合計 615.304

(H27/9/26 ~ H28/1/21) 敬称略

仏教企画発行の刊行物

- List of publications including 'うたい継ごうよ、子守唄', 'まんが問答 一期一話', '道元禅より見たる般若心経解説' CD付き, etc.

曹洞禅グラフ

[発行日]

- Publication schedule for '曹洞禅グラフ' with dates and prices for different quantities.

お申し込みは

仏教企画 〒252-0113 神奈川県相模原市緑区谷ヶ原 2-9-5-5 TEL 042-703-8641 FAX 042-783-0989 fujiki@water.ocn.ne.jp

～お客様コード番号をお知らせください～

仏教企画の貴寺のコード番号は4桁です。お申込みなどの時に 1. お客様コード番号(4桁) 2. ご寺院名 3. 電話番号 をお願い致します。2・3は確認のためお聞きしております。

★ ご支援口座名 ★ (郵便局扱いです)

社会福祉法人輝雲会 (手まり学園用) 00280-0-115818

仏教企画 (仏教企画通信用) 00160-5-10996

編集後記

通信販売最大手の「アマゾン」がお坊さん派遣しますと打ち出し、既成仏教界は大慌てである。「アマゾン」が打ち出す前に「イオン」や幾つかの団体がインターネットでこのサービスを引っ張り出して、インターネットがあらゆる分野に大きく入り込んでいることを表している。このことは都会地においてお坊さんとの縁が日常生活の中になく、お寺と日常縁がない方々にとっては、身内が亡くなった時には互助会やお葬儀屋さんへ依頼し派遣してもらっているのが実情で今回「アマゾン」「イオン」他が新たに参入してきたにすぎない。菩提寺を持たない人口が多くなり、わかりやすく、安心できる手立てがなければこの現象は当然の成り行きともいえる。このことは何も手を打ってこなかった付けが回って来たともいえる。しかしながら、迎え撃つ我々は指をくわえているわけにはいかない。いかに「曹洞宗のお坊さん」というブランド力が出せるかだ。「お坊さん派遣」がきっかけの話ではあるが、実は世の中が大きく変わろうとしている現状の中で、これからのお寺はどうあるべきかが我々が本来真摯に取り組む課題ではないだろうか。今後、お寺がそれぞれの地域でどう役立つのかを宗門を上げて議論し、一丸となつて向かう姿勢こそが、この問題を解決してくれるカギだと思ふ。我々は世の中から大きく試されているのだ。 合掌

137号夏号から新しい連載が始まります。 1、丸山劫外師「遺経」の解説 2、柘野俊明師「禅と日本文化」(2)ご期待!